合同教会の人びと3

南あおいのスキーの技術はそれほど下手ではなかった。呑みこみが早いのかもしれない。リフトも二回目以降はそれほどミスはなくスムーズに乗り降りできた。柔らかな新雪に朝の陽射しが当たると心も晴れ晴れとしてきた。静間はスキーも悪くないなと思い返していた。ただ年齢からか時折、穴にハマると身体がしたたかに打ち付けられてしまいしばらくは起き上がれなかった。若い頃と違って転び方がひどい。それに比較するとあおいはめったに転ばなかったが時々は頭から突っ込んで行く派手な転び方をした。静間が手を掴んで起こしてやるとあおいから笑顔がこぼれた。陽射しに映えて美しかった。色白なんだと静間は思う。美人の条件として色が白いということがあるのだろうと初めて感じた。それは一緒に来ためぐみや比較するのもおかしいかもしれないが瑠奈もまたそうであった。彼女たちは顔色がいいとは言えなかった。何度目かのあおいを抱き起こしている時、あおいの顔が静間のウエアの胸のあたりをすべっていた。それから胸に耳を押し当てた。静間は唾を呑みこむ。

「あれあれ、何か聞こえますよ。携帯の着信音みたい」

「会社からだろうね。レストランで掛け直すよ」

まったく会社から年がら年じゅう監視されているようなものだと静間は苛立った。おおかたはユーザーからのクレームだ。どんな簡単な事でも受付の女は静間に転送する。

まるで逸らされたものを取り戻すように静間はあおいに尋ねた。

「あおいちゃんて？　やっぱり彼とかいるのかな」

「え？」首をひどく斜めに傾けてあおいは困惑の表情を浮かべる。

「気になるんですか？」

「多少は、ね」

「木島さんが私に訊いたらセクハラですよね？」

「俺もセクハラになるのかなあ」

「さあ、どうでしょうかね。あ、あたし、彼がいても他人には言わないですよ。言って何になりますか。そうでしょう？」

言われてみればそうだった。そういった自分の態度自体がオヤジ臭いものだった。

「だって…」言葉はそこで途切れた。聞き取れなかったのかもしれないし声がフェードアウトしていったのかもしれない。次の瞬間、あおいはちょっとためらうようにして携帯電話を取りだした。「ちょっと待ってね。メールが来てる」

静間はゲレンデの中途で立ち竦んでいては他の客に迷惑なので先に行くことにした。この頃増え始めたボードがひっきりなしに滑って行くからだった。

「第二リフトまで先に行ってるよ」

「あ、そうですか。すみません、ね」あおいの表情が硬くなって大人びて見えた。

それから十数分後、あおいはやってきた。依然として木島やめぐみたちと逢うことはなかった。彼らは何処をすべっているのだろう。
「さっきのメール、うっとおしいやつからでしたよ」あおいは苦笑しながら言った。そう言われても静間は困る。少し若い世代になるとやっぱり違う。自分の主観が客観だと思い込んでいるのだ。もちろん親しい間柄で共感が予測できるならまだしも知り合ったばかりでそれはないだろうと静間は感じていた。だからその言葉には反応のしようがなかった。
「ああ、着信の確認、忘れてた。まあ昼休みでもいいかな」静間は切り口を変える。
「あ、新しいですね、その携帯！　いいなあ」
そう言われるとまんざらでもないがゼロ円の携帯にすぎない。やがて普及して珍しくもなんでもなくなるものなのだろうが、たまたま手に入れた赤色は入手困難だとショップの店員も言っていた。
「ちょっと触れさせてもらってもいいですか？」いいとも悪いとも言う間もなく静間の手から小さなすべすべとしたあおいの手に携帯は渡っていた。
「あら。この着信の番号って見覚えあるなあ」
それからあおいは自分の携帯を取り出して静間のそれと見比べる。
「え、同じだよ。この番号、掛けてる時間も。侑じゃないの！」
「侑？　って誰だ？　あ、さっき車内で掛けてきた人か。高橋って」あおいは先ほどは聴き漏らしていたようだった。
「え、なんで侑が静間さんに電話してるの？　あの、英会話の事務員ですよ。知りませんか？」
「ああ、彼か。思い出した。いつやらクリスマスのパーティーに来てくださいっていきなり言ってきた学生だよね。知りあいなの？」
「そりゃ、同じ教会ですから。合同教会ですから、知ってますよ、もちろん」
「ああ、そうだったよね」静間は自分の教会に対する関心のなさには自分でも呆れた。
「掛けなくてもいいんじゃないかと思いますよ」
静間が考えていた。高橋君は自分の意志ではなく瑠奈に示唆されて静間を誘っているのではないだろうかと。それならば今後の英会話では気まずいことになりはしないかと。
「もうスキーに来ていると告げてますから。クリスマスパーティーには間に合わない時間帯ですから。そういうものがあるのは知っていたのですが、私は欠席すると母にはことづけしておきましたからね。侑だって知ってたはずです。もちろん母も教会で食事や飾り付けの手伝いをしているわけだから母に訊けばいいわけなんですよ。直接じゃなくても。もう携帯の番号やメールアドレス変えようかな」
静間は侑に電話を掛けた。さすがに止めはしなかったものの、あおいは訝しげな表情を見せた。その顔はこのお人よしが何もわざわざ関わり合いにならなくともと語っているようだった。

「ああ、何度も電話いただいたみたいで申し訳ない。スキー場にいましてね」
「あ、僕のこと覚えてくれていたんですね。で、今日のパーティはどうなんですか？　出席できそうですか。瑠奈先生や教会の人たちと朝から大変なんですよ。それから僕のブログ読んでいただけましたでしょうか？」
「いや、ああ、それからだね。パーティはとてもじゃないけど行けそうにはないんだよ」
「そんなあ」落胆のため息が漏れる。そうはいっても静間が行かないくらいはたいしたことではないだろう。
「それにしても君はやけに僕にこだわってくるじゃないか。僕はキリスト教には関心はないんだよ。それはまったくと言ってもいいくらいだ。この際、はっきり言っておくけど宗教の押し付けはよくないぜ。その点はマネージャーの春子さんやあおいちゃんと同意見だね、やみくもに信者を増やしてどうするんだい？」
「いえ、僕らはカルトではないですし、そんなつもりはないですよ。ただクリスマスを楽しく過ごせたらいいなって思うだけで」
「悪いけどとてもじゃないけどそうは思えないんだよな。それとも僕がクリスマスをひとりで過ごしているのは可哀そうだとでもいうのかね！」
「まあ瑠奈先生はそんなようなことを言ってましたけど」
「まったく！　そんなことだから独身ＯＬのマネージャーにも嫌われるんじゃないのかね？」そうは言いながらも静間は内心は言い過ぎていると思わないでもなかった。ひょっとしたら彼は涙ぐんでいるかもしれない。いや電波状態がよくないのか雑音に混じって鼻をすするような音が聞こえてくる。
「言いすぎかなあ？　替わる？」
「え、あたしがですか？　そりゃまずいでしょ。侑にはあたしと静間さんが一緒にスキーに来ているなんて言ってないのよ」
「あ、でももう遅い。聞こえちゃった」
それは地獄の底からこだましてくるような低く響く声だった。
「なんで、南さんと静間さんと一緒にスキーに行ってるんですかあ」激しく昂奮していた。
なぜ、なんだ。独り言が何度も繰り返された。
「そんなに不思議なことないのよ。侑。あたしたちは瑠奈先生の同じクラスなのよ」
「だって年齢的にぜんぜん違うでしょう！　僕は、混乱、いや錯乱しました。こんなことを瑠奈先生にどうやって説明すればいいのでしょうか！」
「おい、キミ勘違いするなよ。ふたりだけじゃない。君は知らないかもしれないが木島という男や他に女性ふたりも同伴しているんだ。キミの思うような関係じゃない。変なふうに思うんじゃないよ」
「そうよ！　瑠奈の旦那が強引に誘ってきたんだからね！　まあ教会に行くよりかはましだから来てるんだけどさ。木島なんてあたしたちのことほったらかしよ」
「瑠奈先生の旦那ってあのひと結婚してたのですか」

「そうよ。もう別れたみたいだけど。あんたそんなことも知らなかったの？」
「知らないですよ。南さん今まで言わなかったし」
「そんなことあたしは言わない。瑠奈先生から聞いていたかと思っただけよ」
「そういうことか…」
「それでさ、あんたこのスキーの話を瑠奈先生に報告するつもりなの？　彼女きっとショックを受けるわよ。あんたに八つ当たりするかもしれないよ、ね」
「僕はただ、スキーに行ってる人たちみんなに合同教会の良さをわかってほしいだけです」
「あたしは毎週行ってたじゃないの」
「じゃあ、なんで来なくなったんですか？」
「日曜の度ごとに集まって悩める人や迷える人たちのお世話をするのに疲れたの。旅行だって行けないじゃないの。あんたは学生だからいいけど会社勤めしてたら忙しくて日曜のたびごとに行ってられないわよ」いつの間にか静間の手を離れて携帯はあおいの手の中にある。
「ああ、まるで聖書の中のあの…」
「やめてよ。知ってるから。さんざん言われてるから」
あおいは携帯を固く握りしめて語り口調は熱かった。
「それにあそこにいる人たちとは肌が合わないのよね。漁師かホストが多いでしょ。バンドやってるフリーターや葬儀屋とか。あたし普通の会社の人がいいの」
「言いますねえ。ひどい発言だ！」
「現状を見なさいよ。漁師が魚が取れなくなったからってホストやりますか？」
「まあ、なぜかそういう人が多いんですよね。あそこには」
「とにかくね、あたしたちには関わらないでくれる？　静間さんも迷惑なのよ」
「いや、南さんはともかく、静間さんの道までも塞いではいけないと思いますよ。静間さんに替わってください！」
「で、どうなの？　瑠奈先生には報告するの？」
「します」
「どうして？」
「頼まれたからです！」
「あ、そう、じゃあ勝手にしたら」そうしてあおいは静間に替わった。
「あ、静間さん、僕のブログだけでも読んでもらえますか。合同教会の歴史について書きました。ほとんど静間さんのために書いたようなものです。みんなから批判されていて歴史の歪曲がひどいとか、教会のなかにもちょっと詳しい人もいるんです。瑠奈先生とか南さんだけで教会を判断しないでください。教会に来ないインターネットでしか参加していない人も多数存在してるんですよ。その人たちに僕は発信していたのですが、信頼を失ってしまいました。瑠奈先生のライブ動画がたぶん悪評の根源だったと思いますけど僕のブログが炎上してしまって…」

「人のせいにするなよ」あおいが言った。
「いいよ。わかったよ。ブログは読むよ」こいつらは知らないな。俺だってキリスト教の幼稚園に通っていたんだ。聖書や讃美歌くらいは少しは知っている。内心そう思った。

ようやく五人が集まったのは昼も過ぎた午後一時半でピアノのあるロッジの食堂から徐々に人がいなくなっていく、そんなころだった。昼前に携帯で連絡を取り合ったのだったが昼は食堂が混み合うという理由から時間をずらしたのだった。その結果、木島を除く四人は疲れ切ってしまい歩みものろのろとしていた。耳たぶは冷え切っていた。雲行きはやや怪しくなってきていた。みぞれ交じりの冷たい風が吹き始めていた。

木島は上機嫌でコーラをがぶ飲みしながらライスカレーと地元名物のそばを食べていた。
「今日は満足したなあ。ひさしぶりに滑ったという気分だ」
彼は毎週のようにスキー場に訪れているはずであったが、ふだんはそれほど滑らないのであろうか。
「雪質が良かったな。天気が良すぎると雪が融けはじめてしまうからね」
四人はうなずいたものの、語る元気はなかった。どうやら木島はひとりで、静間はあおいと、めぐみはあきなとずっといたらしかった。モーグルコースは足腰の負担が大きいために木島以外は避けていたから木島と出会うことはなかったのだ。
「もう普通のコースじゃ面白くないんだよね。南さんは満足できたかな？」
「ええ、まあそれなりに」あおいは上司の前では大人しい。
「ずっと静間と一緒だったの？」
「ええ、あたし静間さんと…」話しはじめて静間はドキリとした。英会話の事は黙っておいたほうがいいんじゃないかと思った。すると何か電流でも通じたようにあおいはぴたりと口を噤んだ。ちらりとあおいは静間の顔色を窺ったのだろう。
「昼からはあたしもモーグルコースにチャレンジしてみる！」急にめぐみが言い始めた。
「だからあきなちゃんはそっちに合流してね。静間さんと南さんの方に！」
「ええ？　そんな。迷惑じゃないかしら」
「いえいえ、そんなことはないですよ！」静間とあおいは声を揃えていた。
「私は滑れないんですよ。ほとんど」
「あたしだって滑れないですよ」
とにかく連れてきた割には初心者の面倒は見たくないというのが木島の本音で、そのために初心者に毛が生えたくらいの静間を連れてきたのは彼女たちの面倒をみさせるためだったのだ。だから午前中あきなにつきあっためぐみが昼からはあきなから離れるというのはけっこう自然な流れなのだが、誰もが自然でないものも感じていた。いや、あきなはそれほどでもなかったかもしれない。屈託がないというのは若さの特権なのかもしれない。
（連載第三回）